

からかい上手の松浦さ  
ん

ソルティー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

はじめまして！この小説の作者ことソルティーです！ラブライブ！サンシャイン!!  
？の松浦果南ちゃんが大好きで、もしも自分が果南ちゃんの弟だつたらなあーという想  
いからこの作品は誕生しました。

果南ちゃんが僕と同じく大好きな方又ラブライブ！が大好きな方、試しに是非読んで  
みてください！感想どしどしあ待ちしております！

あらすじ

今年から中学生の少年松浦奏太は姉である松浦果南に色仕掛けをされたり誘惑され  
たりでからかわれてばかり。これはそんな奏太と果南の

(熱き)?) 聞いの記録である。

# 目 次

三度の飯よりゲームが大好き |

1

マーメイドはからかうのがお好き

5

からかい上手の姉ちゃんの友達と姉ちゃんはくすぐりが大好き |

10

## 三度の飯よりゲームが大好き

僕の名前は松浦奏太。今年から中学1年生。趣味は読書とゲームでほぼ一日中やっている日もある。苦手なのはスポーツ系全般でぶつちやけルールするからない。「PK? ナニソレオイシイノ?」つてさすがにそれは大袈裟過ぎと思われるかもしれないがそれくらい興味が無い。性格はいわゆるコミュ障で家族以外の人と話すのにはいつも苦労している。勉強は・・・聞かないでくれ。一つだけ言えるのは文系だと言うことかな。そんなこの僕、松浦奏太には4歳年上の姉がいる。

名前は松浦果南。インドアでコミュ障な僕とは対照的に体を動かすことが大好きでコミニケーション能力も十分にあるようないわゆる

アウトドアで陽キヤ（僕よりは）である。姉ちゃんは、僕を本当に可愛がってくれて、小さい時から僕の憧れだった。一時期挫折した時もあつたみたいだけど今はスクールアイドルとかいう活動もしているらしい。僕もライブを何回か見に行つた事はあるが、アイドル無知な僕でも一気に引き込まれてしまうようなそれくらいクオリティーは半端じやなかつた。そんな非の打ち所がないような姉に僕は一つだけ悩みを抱えていた。それは「からかってくる」事である。偶々

姉ちゃんが読んだ漫画が同級生の男の子を女の子がからかうつて言う話でそれを読んだ日から僕のことをからかつてばかりいる。僕の布団に夜な夜な入つてきたり、風呂に入つてきたり、色仕掛けをしてきたり・・・。しかも高校生になつてからスタイルもめちゃくちゃ良くな

つて。思春期の僕には余りにも刺激が強すぎる。これはそんな僕と姉ちゃんと時々姉ちゃんの友達を巻き込んだ闘いの記録である。

### 入学式当日

拓夢「いや～まさか中学でもクラス同じになるとは思わなかつたぜ。

宜しくな！奏太。」

奏太「おつとう・・・。」

拓夢「ははつ相変わらずお前は本当に声小さいなー。この距離でこの

音量だろ？」

奏太「しつし方ないだろ！僕、コミュ障だし・・・」

拓夢「まあいいよ。人には事情つてのがあるからな。」

彼の名前は鈴木拓夢。僕の数少ない友人の一人で今では、ゲームの話などを語り合うヲタ友と化してきている。

### 3 三度の飯よりゲームが大好き

拓夢 「ところでよー奏太。今日から新しいゲーム発売するの知つてたか?」

奏太 「えつ?何かあつたけ?」

拓夢 「ほらほらお前が「命削つてまで手に入れてやるー!」って言つ  
つてた。「トレジャーモンスター2」。」

奏太 「えつ、あ、あああああー!!忘れてたーーー!」

すっかり忘れてしまつていた。そう今日から発売されるトレジャーモンスター2。  
広いマップの中からモンスターを見つけて仲間にして敵のモンスターと戦わせるつて  
いうあのシンプルなんだけど中毒性のあるあのゲーム。ただでさえ大人気だった前作  
が最新技術でグラフィックも良くなつて、さらにオンライン対戦まで出来るようになつ  
た最新作が10年の時を経て復活!とか言つてネットで超話題になつてたあれ  
の発売日なのを僕は忘れてしまつていたのか。松浦奏太、痛恨のミス!

奏太 「拓夢、お前もあるゲーム欲しいつて言つてたよな?」

拓夢 「ああ、うん。」

奏太 「買ひに行くぞ。」

拓夢 「いつ?」

奏太 「今に決まつてるだろー!」

拓夢「ひいいいーごめんなさいーー！」

お小遣いも丁度貯まってるし、今が買い時なのは間違いない！

奏太「ほら走れ！ゲームは待ってはくれないぞ！うおおおーー！」

拓夢「へいへい。こういう時は陽キヤになるんだよなあ・・・奏太つ

て。」

奏太「ん？何か言つたか？」

拓夢「いや、何でもない。というかこんな最近のラノベのキャラみたいな会話してる場合じやないだろ？」

奏太「おつと。それもそうだな。よーしじやあ走るぞ拓夢！」

拓夢「おう！」

こうして僕達は新作ゲームを買いに近くのゲームショッピングに向けて走り出した。

# マーメイドはからかうのが好き

ゲームを買ってご満悦の僕は拓夢と別れ、家へと帰る。

「よーし早速帰つてプレイするぞ！」

しかし僕は忘れていた。姉ちゃんととの約束を…

帰宅しようと家に帰る直前僕は時計を目にする。

「そういえば姉ちゃんが4時までには帰つてこいとか言つてたなー」

時計の長い針は12を指し短い針は6を指している。

「・・・つて2時間も遅れてるー!？」

今は春で陽が長いもんだから、てつきり4時半くらいだと思つてた。

どうしようバレたら絶対何か言われる時間的に姉ちゃんもとつぐに帰つて来てるだろう。こうなつたらバレないよう家に入るしかない。

ガチャ・・・

奏太「た、ただいまー・・・。」

人の気配は無い。よし、行けるいけるぞ！

僕の部屋は2階にあるのでそつと足音たてずに階段を登る。

と、その時、

果南「そうたー？何してるのでかなん？」

奏太 ギクツ「はっ!?」

はいバ レまし た g a m e o v e r がめおべら。

果南「今何時だと思つてるの？6時だよ？6時！」

奏太「なつななな何だよそそそそれがどうかしたのか？」

ヤベエ僕めつちや動搖してるし！

果南「姉に向かつてその態度は何？これはもうお仕置きが必要かな？」

あつ！まずいこれはいつものやつだ。に、逃げねば・・！

果南「ふふつ逃がさないよ それ！ハグうー!!」

奏太「ぐふわああ！」

ああ頭がクラクラしてきた。姉ちゃんのお仕置きとはこの「ハグ」

である。普通の人からしたらどこが？と思うかもしねないが

考えてもみてくれ、グラマラスな身体のJKに抱きつかれる中学生男子の気持ちを！しかもお仕置きとかに限らず、この姉はいつでもハグしてくる。・・そりやあ溜まるもんも溜まるよ。何をとは言わないけども。

とにかく今はこの状況を何とかせねば！何度も何度も反省する僕に  
姉ちゃんはようやくハグして腕を解いた。べつ別にもうちょっとく  
らいハグされてたかったとかなんて思つてないし！思つて・・ないし。  
部屋に戻り僕はベッドに横になる。

「はあー今日も色々あつた。」

それについてももう中学生か一小学校時代が懐かしい。口クな思い出無いけど。  
再び時計に目をやる。時刻は19時。

「そろそろお風呂にでも入るかなー」

僕はそう言つて風呂場へと向かう。しかしこの時、僕はまだ気づいていなかつた。姉  
ちゃんが僕の独り言を盗み聞きしてたことを。

果南「そろそろお風呂ねえーふふつ??」

入浴

奏太「はあー落ち着くはー今日一日の疲れがどんどん消えていくー」

そんな事を呟きながら風呂に入つてると風呂場のドアを開ける音がした。

果南「お背中流しましようかー？なーんて♪」

奏太「ほわあ!?姉ちゃん!?何で風呂入つて来てんの!」

果南「何でつて・・・奏太の中学の入学祝いに？」

奏太「どんな祝い方だよ！」

「どうか早く出て行つて欲しい僕の理性が！  
どうか早く出て行つて欲しい僕の理性が！」

果南「つていうかバスタオル一枚つてそれ落ちたりでもしたら見えてしまうじやないか！」と

奏太「えつあついやその・・・」

まずい視線的に僕は姉ちゃんの胸を見てしまつてた。どうか自然と  
目が釘付けになつてしまつていた。

果南「姉の体に興奮しちゃうえつちな弟はお仕置きしちゃうぞ？」

耳元でそう囁きながらわざと胸を当てるよう体をこちらに向ける姉ちゃん。僕は  
もう色々耐えられなくなり

奏太「うつうわあー！」

咄嗟に風呂場を出て服を着て、自分の部屋へ逃げる。

果南「ああー今日も可愛いな。奏太は。・・・うん？千歌からメールだ。何だろう？」

さつきの事を思い出す度に心臓がドキドキしてしまう。この感情は  
一体何なのだろうか？別に僕は姉ちゃんの事なんて憧れではあるけど

9 マーメイドはからかうのが好き

そういう目では・んんーー!  
この日の夜は結局全然眠れなかつた。

# からかい上手の姉ちゃんの友達と姉ちゃんはくすぐりが 大好き

朝、目が覚める。今日は、土曜日で学校もお休み。昨日は色々あつて疲れたから今日は沢山寝ようと再び二度寝をしようとする僕。

しかし何かがおかしい。何というか、自分の上に何かいるそれはベッドにかけてる毛布じやなくて、もっと何か重い。勇気を振り絞つて僕は毛布をはだけて正体を確認する。すると出てきたのは、

千歌「あ！起きた？おはよ奏太君??」

奏太「うわああー!?」

千歌「もうそんなビックリしないでよ！私までビックリしたじやん。」

この人は確か、高海千歌さん。姉ちゃんの幼馴染で姉ちゃんが所属してスクールアイドルグループ「Aqours」のリーダーだつた気がする

奏太「でも何で家に？」

千歌「それはねー・・・」

遡る事昨日の夜

果南の携帯に千歌から一通のメールが届く。

内容は果南の家にみかんのおすそ分けをしたいとのこと。

許可した果南は千歌を家に招いた。

その際に千歌が帰るのが面倒と言い出し、泊まることになり現在に至る。

千歌「という訳なのだ！」

奏太「いやどういう訳ですか！家に来た理由は分かりましたけど、どうして僕のベッドに？」

千歌「一応先輩として奏太君を起こしてあげようと思つて、奏太君の部屋に來たの。でも奏太君の寝顔見てたら私まで眠くなっちゃつて

えへへ♥？」

奏太「はあーまあじやあそういうことでいいです。」

千歌「それに本当はそんなに嫌でもないんじやないの？奏太君？」

ニヤニヤしてそう聞いてくる千歌さん。

奏太「なつ！そつそんな訳ないじやないですか！へつ変な事言わないで下さい。」

千歌「あはは、ごめんごめん。」

果南「奏太ー朝ごはん出来たよー」  
一階から姉ちやんの呼ぶ声がする。

千歌「あつ、果南ちやんが呼んでる。いこつ奏太君。」

奏太「はい。」

そう言つて僕の手を握つてくる千歌さん。いきなり手を握られて  
僕はついドキドキしてしまう。

千歌「そうだ、奏太君。」

奏太「ん? どうかしましたか?」

すると千歌さんは僕の耳元で

千歌「さつきからずつと分かつてたけど、奏太君のおつきくなつてるね♪もしかして  
私が「こーふん」しちやてたのかな?」

奏太「はあ!違いますよ!こつこれは生理現象です。」

千歌「だよねー。ふふつ♪」

全く何を言うのかと思つたら・・・半分は本当だけど。

朝食の時間は至つて普通だった。姉ちやんと千歌さんはどうやら次のライブの話を  
してゐらしい。僕の出番は無さそうだ。  
と思つた矢先、

千歌「あつそうだ果南ちゃんあのねーさつき奏太君つてば私がベッドに潜つたら私でこーふんしておつきくしてたんだよー。」

奏太「ゴボツ！」

思わず飲んでいた麦茶を吹き出しそうになつた。

奏太「何言つてんすか！千歌さん、さつきも言つたでしょう？？

あれは生理現象だつて。」

果南「ホントにー？奏太？」

奏太「・・・本当だよ。」

果南「ふーん、まあいいや。それより奏太、揉んでくれない？」

奏太「はい！？」

揉むつて、ええー！？そつそれつてつまり・・・

果南「最近体が重たくつてさー健康には気をつけてるつもりなんだけどー。」

体が重たく感じるつてやつぱりそうなのか？ そうなのか！？

いやでもいくら姉弟だからつてそれはさすがに。でも・・こんなチャンス二度と無いよなあ・・・つて何を考えてるんだ僕は！いやでも本当に体が重いつて、む、胸の事だよね。やっぱり大きいから。散々悩んだ挙句僕は

奏太「そういうのは、千歌さんにやつてもらつた方がいいんじゃない？」

果南「えつ何で、「肩」揉んで欲しいだけだよ？」

えつ？肩？肩って言つた今？じゃあ…さつきまでの僕は何を考えてたんだあー！！

果南「まさか胸とか思つてたり？」

奏太「そつそんな訳無いだろ！揉めばいいんでしょ肩を！」

それから10分くらい僕は姉ちゃんの「肩」を揉んだ。

果南「ふうー奏太のおかげで気分が良くなつたよ。サンキュー。」

奏太「そりやどうも。」

果南「そうだ、お礼に姉ちゃんが何かイイコトしてあげようか？」

奏太「えつイイコト？」

ちよつとまで一回落ち着け僕。イイコト？それつてもしかしてそつち系の？そつち系なのか！いやでもさつきみたいに勘違いかもしれない。そうだきつとそうだ。でも、もしかしたら

果南「あつ千歌ー。」

すると唐突に姉ちゃんが千歌さんを呼ぶ。

千歌「どうしたのー？果南ちゃん。」

果南「ちよつとね、色々あつて奏太にイイコトしてあげようと思つて」

千歌「えつ何それ！」

果南「それはねー（ヒソヒソ）」

千歌「ふふつそれは面白そうだね♪」

何やら二人で話している何の話だろう？

千歌「奏太君ー私も奏太君にイイコトしてあげたいなあー??」

えつ千歌さんも？一体何なんだ？まさか本当にそういう  
その・・いやらしい事なのか？何かヤバイ気がしてきた。

ここはとりあえず、

奏太「気持ちは嬉しいけど、それだけで十分ですよ。」

何だかデジヤブを感じるけど気にせずに僕はそう答えた。

果南「ええー何でよー。」

千歌「せつかく私達が」

果南&amp;千歌「肩たたき」をしてあげようと思ったのに??」

デジヤブは本当だつたーー！一回も同じような罠に引っかかるなんて  
僕はアホか！はあー顔が熱い。二人は僕のこの反応を期待してたのか！

千歌「あはは、そんなにお顔真っ赤にしてー??」

果南「一体奏太は何を考えたのかな??私達に教えて？」

奏太「そんなの言うわけ無いだろ！」

果南&amp;千歌「言わないならこうしちゃうぞお!?」

そう言うと二人は僕の体中をくすぐり始めた。

奏太「うわあー！やつやめろー！」

果南「本当の事を言わない限りやめてあげなーい。」

はあーどうすれば良いんだ。そんな事を考へてゐる間に二人の細い指が僕の体を刺激する。あれ？でも今の状況ちょっとエロくね？

一人の中学生が二人のスクールアイドルやつてるJKにくすぐられてるつて言うシチユ。あれ、ヤバイ自分でそんな事考へといてまた顔が熱くなつてきた。

千歌「あれー奏太君また奏太君のココ、おつきくなつてない？」

果南「本當だ、奏太は本当にスケベだねー??」

二人の言う通り僕の股間がめっちゃ膨らんでる。

果南&amp;千歌「エツチな気分になつちやつた？」

奏太「えついやそのそれは・・・」

果南&amp;千歌「もつとスゴイ事しちゃう??？」

奏太「うつうわあー！」

僕は二人を振り払い、一目散に拓夢の家に逃げてつた。拓夢には何事かと心配されたがとりあえず姉ちゃんと喧嘩したという適当な事を言つて泊めてもらつた。家に帰る

17 からかい上手の姉ちゃんの友達と姉ちゃんはくすぐりが大好き

と、まだ二人はいて、また何かされるのか緊張したが二人も流石にやり過ぎたと反省しているらしい。

べつ別にガツカリなんてしてないからな（ドキドキ）